# Fate/Zero　闇を駆ける者

義経

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ　闇を駆ける者

【Ｎコード】
Ｎ８６８０Ｘ

【作者名】
義経

【あらすじ】
もしも、間桐雁夜が一般人として生活を送れていなかったら、ある事件に巻き込まれて新たな力を得ていたら、間桐の名を捨てていたら、その力を持って聖杯戦争に挑んでいたら、これはそんな物語。魔術師ではない雁夜が聖杯戦争を戦い抜く。
本作はＦａｔｅ／Ｚｅｒｏの二次創作です。

## 序章（前書き）

作者は原作のＦａｔｅ／Ｚｅｒｏを読んでいません。
アニメに感化されて描いています。
よって原作と設定が変わる可能性がありますのでご了承ください
それでも良い方はお読みください。
キャラの口調がおかしい場合もあります。

# 序章

「マスター、二体のサーヴァントが港の工場地帯で確認、さらに片方のマスターと思われる女性も確認しました」

『ああ、こちらも確認できた』

オレはサーヴァントと放った使い魔のおかげでその様子が確認できた。

「それと、近辺にもう一体のサーヴァントの存在も確認できました」

『もう一体？』

「はい、さらにそのサーヴァントのマスターと思われる少年も確認できました」

自らのサーヴァントの言葉に自らも風術を行使して付近を探索。

すると強い魔力を持った存在がいることに気がつき、

そのすぐ近くにもう一人魔力を持つものがいることを確認する。

おそらくそこから港区の工場地帯の二体のサーヴァントの闘いを見るためだろうか。

だが見るだけなら使い魔だけで十分のはずだ。

『わかった、引き続き監視を続けてくれ』

その言葉を最後にサーヴァントとの念話を終える。
近くにあった椅子にどっかりと倒れこむように座る。
そして自らの令呪を仰ぎ見るように掲げる。
『ついに、始まったんだな。聖杯戦争が』
そう言いながら掲げた腕を降ろす。
二体のサーヴァントが激突したという情報を聞いてやっと実感した。
『正直、マスターとか、サーヴァントとか。俺にでか過ぎるものだったから実感湧かなかったんだけど』
そこまで言って区切り、深呼吸をして立ち上がる。
『ここまで来たら後戻りは出来ない、俺には絶対にやらなければならないことがある』
だからこそ、もう迷う時間は無い。
『始めよう聖杯戦争を、魔術師同士の殺し合いを、あの娘の笑顔を奪った聖杯を、破壊するためにも』
壁に掛けていた服を取り身に着ける。

この服は彼が戦闘を行うときに用いる、いわゆる戦闘服。
この服には簡単な戦術が施されており、ちょっとの衝撃では破壊どころか装着している人間にもダメージは無い。
まぁ、サーヴァントの一撃を食らえば一発であろうが。
サーヴァントからの情報で敵のサーヴァントの位置はわかっている。
行き場所は決まった。
『いくぞ、アサシン』
「御意、マスター・・・・・・雁夜」
俺の、間桐雁夜ではなく。
緋神雁夜としての闘いをしよう。
願うことは唯一つ、あの娘の笑顔を取り戻すために

## 序章（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

## 第一話　帰ってきた精霊術師（前書き）

義経です。
第一話の投稿です。

## 第一話　帰ってきた精霊術師

「落後者がよくおめおめと顔を出せたものよ」

『久しぶりだな、くそ爺』

オレは間桐邸の一室で一人の老人と対峙していた。

老人から浴びせられる視線は完全に嫌悪のもの。

「その面もう二度とわしの前に晒すでないと、確かに申したはずだがな」

老人はその嫌悪を隠そうともせずにこちらに向けてくる。

それはそうだろう、何せオレは間桐を捨てた男なのだから。

『遠坂の次女を、桜ちゃんを養子に迎え入れたそうだな』

「耳の早いことよ。して、それがどうした。」

オレがその話を聞いたのはつい最近、偶然幼馴染の葵と出会ったときだ。

それを聞いたからオレは二度と戻らないと決めていたこの間桐（いえ）に戻ってきた。

『そうまでして、間桐に魔術の因子を残したいか』

「それをなじるか、貴様が。間桐を捨て、魔術師であることを止め、名も捨てた貴様が」

そう、あの日。

オレは間桐の名を捨てた。

過去の自分と決別するために、新しい自分として生きるために。

『そうだな、あんたとしてはそいつが許せないってとこか』

「たわけ、碌な魔術回路も持ち合わせておらぬ貴様なんぞに価値など無いわ」

自らの息子である自分を魔術回路の有無で決める。

その臓硯に少し苛立ちを感じながらも冷静を保つ。

「して、何のようだ。緋神雁夜」

緋神雁夜、それが今のオレの名前。

元々は偽名として使っていたが、現在はそれを正式に使っている。

『取引だ臓硯』

「取引？」

『そうだ、お前の願いは聖杯による不老不死だろう』

人と呼べるものではなくなったこの老人。
それでもなお永遠の命を欲しているのだ。
「それで」
『今回の聖杯戦争でオレは聖杯を持ち帰る。そうなれば、桜ちゃんに用は無いだろう』
「あの小娘から、手を引けと」
『そうだ』
「う～む」
臓硯はこちらの言葉を聞いて考えるように手をあごに持っていく。
だが臓硯はこの条件を飲むはずだ。
臓硯は失うものはない、オレが勝手に戦うというのだ。
そして、
「よかろう、貴様との取引に応じてやろう」
その言葉を聞いて安堵の息が漏れる。
『なら、桜ちゃんは今どこにいる』
そう言うと臓硯はニヤリといやらしい笑いを浮かべる。

その笑みを見てオレはこれまでの経験で察することが出来た。

「遠坂の娘は今蟲倉におるわ」

その言葉がオレの脳内を駆け巡った。

「どうする雁夜、すでに壊れかけの小娘をそれでも救うと」

『当たり前だ』

救って見せる、あの娘を。

オレの命に代えても、絶対に。

それから、一年の時が過ぎた。

## 第一話　帰ってきた精霊術師（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

## 第二話　呼び出される影（前書き）

第二話の投稿です。
今回はいきなり急展開です。

## 第二話　呼び出される影

間桐邸の一室に雁夜と臓硯が揃っていた。床にはサーヴァント召喚のための魔法陣が描かれている。

雁夜の手には令呪が刻まれている。

「クックックッ、まさか貴様にサーヴァントを御するほどの魔力を持ち合わせていようとわな」

『どうでもいいが、さっさと召喚を始めさせて貰うぞ』

臓硯の話ではすでにセイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、そしてバーサーカーの召喚はすでに行われたらしい。

そうなると残りのサーヴァントはキャスター、アサシンの二体だけ。それならばオレの生き方からしておそらくは、

「では、はじめよ」

『告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ』

召喚のための呪文を発するたびに令呪が反応し魔力が集中されていく。体中の魔力が騒ぎ出す。それと同時に心が躍る。

『誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者』

これから始まるであろう闘いに。
命を掛けた闘いに、奇跡の瞬間を拝めるという事実に。
『汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！』
魔法陣が輝き、部屋を光が包み込む。

「我が名、アサシンのサーヴァント。召喚の儀に従い、ここに参上した」
冷淡な声、心を殺したような低い声が耳に聞こえてきた。
これがアサシンのサーヴァント、漆黒の体に白い仮面を嵌めた長身の男性がそこに立っていた。
『ようこそアサシン、オレが君のマスターの緋神雁夜だ』
そういって一歩前に踏み出す。
「カッカッカッ、アサシンとは貴様らしい」
臓硯はオレがアサシンを召喚したことに納得しているようだ。

だがオレはその言葉を無視してすぐにアサシンに命令を下す。

『アサシン、これからの話は後にしよう、オレの部屋に来てくれ』

「御意」

アサシンはそう言って霊体化する。

臓硯もサーヴァント召喚に成功したので一安心ということで部屋から立ち去ろうとする。

だがオレは臓硯が動き出す前にアサシンに念話で話しかける。

『（アサシン）』

「（何用でしょう、マスター）」

アサシンもこちらの声を出していう話ではないという意図に気付いて念話で応える。

『（妄想幻像（ザバーニーヤ）で一体のアサシンを出してこの邸の中にいる少女を保護してほしい）』

アサシンの真名はこれまでの聖杯戦争ですでにわかっている。

間桐の書庫でアサシンの能力は宝具まで知ったからだ。

オレはこの日のために準備してきた野望を実行に移すことにした。

そのためにまず桜ちゃんを保護する必要がある。

今日は蟲倉をサーヴァントの召喚に使っているので寝室で眠っているはずだ。

「（承知しました、すぐに一人送りましょう）」

アサシン程の暗殺者なら対象を見つけるまでに時間は要らないだろう。

だからこそオレはアサシンのサーヴァントを召喚したかったのだ。

『（それと、オレが合図したら間桐臓硯を殺せ）』

「（御意）」

アサシンはオレが父を殺せと言った言葉に何の迷いも無く応えた。

さすがは超一流の暗殺者である。

アサシンとの念話を終えたオレは臓硯を見る。

この部屋に用はないため蟲倉から出るために階段を目指して歩いていた。

やるなら今しかない。

『アサシン！』

オレは声高らかに自らのサーヴァントに命じた。

その声に反応して妄想幻像（ザバーニーヤ）を使い十人のアサシンに分れる。
一体は霊体化したまま桜を救うためにすばやく移動している。
「ムッ」
臓硯がオレの声と動き出したアサシンに不審を抱き歩みを止めこちらを振り返る、その瞬間であった。
ーーーーードスッ！
九体のアサシンが一斉に臓硯を切り刻む。
持ち前のダガーで刻んでいく。
だがこんな簡単に臓硯が死ぬはずが無い。
「貴様、雁夜。この程度でわしを」
殺せると思うな、そう言おうとしたのだろう。
だが俺はそんな言葉を待ってやるほど優しい人間じゃない。
周囲の精霊を掻き集め力をこめる。
『消え失せろ、臓硯』
手のひらから炎の弾を出して臓硯にぶつける。
直撃した炎弾は破裂して臓硯を包み込む。

「オォォォォォォ」

先ほどまでとは打って変わって苦しみだす臓硯。

『いくらあんたとはいえ、炎には耐え切れまい』

臓硯は蟲を糧に生きているも同然。

その蟲を体内から燃やしているのだ。

「オノレ雁夜。貴様、ワシガ死ネバ。桜ヲ救ウコトハ出来ンゾ」

『安心しろ、くそ爺。手立てが無いわけじゃないんだよ、だから』

オレは最後の一撃を加えるために集中する。

周囲を風の精霊が包み込み、集約していく。

『我が司りし清浄なる精霊よ、その力を解き放たん』

浄化の風が体の周囲を取り巻く。

今の状態の臓硯がこれを食らえば完全に消え去るだろう。

『終わりだ臓硯、お前の願いはかなわない。これで終わりだ、くそ爺！』

「雁夜ァァァァァァァァ！」

風が部屋を包み一気に荒れ狂う風と成りて臓硯を消滅させる。
そして完全に臓硯を殲滅したときに風がやんだ。
『ふぅ、終わったな。いや、始まったのか』
「マスター、間桐臓硯の消滅を確認しました」
いつの間には一人に戻っていたアサシンは臓硯が消えたと断言する。
さすがにサーヴァントの目は掻い潜れないだろう。
『礼を言うぞアサシン』
「サーヴァントに礼など無用です」
さすがはアサシンである、おそらくマスターの命に従うのは当然ということだろう。
『それでもだ、君たちがいなければ臓硯は殺せなかっただろう』
それは事実だ、万全な状態で臓硯に炎を浴びせても、消滅しきる前に逃走するだろう。
アサシンが臓硯を斬ってくれたお陰で止めをさせたのだ。
だが、まだ最後にやら無ければならないことが残っている。
桜を救わなければ。

## 第二話　呼び出される影（後書き）

なんと今回で臓硯退場。
しかも呼び出されたのはアサシン。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8680x/

Fate/Zero　闇を駆ける者

2011年10月24日02時01分発行